論文の和文要旨

論文題目	非対面聴解における問題処理のストラテジー
氏　　名	王睿琪

本研究は、聴解ストラテジーの使用方法に関して、問題解決における理解構築過程の実態を聴解活動の時間軸に沿って調査した上で、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間の相違点を明らかにすることを目的とする。語彙難易度、発話速度、長さが同程度のテキストタイプが異なる物語文 2 編と説明文 2 編の実験教材を用い、56 名の JFL（Japanese as Second Language）学習者を対象として質問紙調査、再話・回想インタビュー、聴解テストを実施し、意識的使用と使用実態の 2 つの観点から非対面聴解における問題処理のストラテジーの調査を行った。質問紙調査から JFL 学習者の聴解ストラテジーに対する意識的使用を分析し、さらに、プロトコルデータから聴解ストラテジーの使用実態を分析した。その上で、聴解ストラテジー問題処理における理解構築の流れ図を用い、音声の聴取から問題箇所範囲・モニター範囲・問題解決の方略の選択・理解の結果に辿るまでの過程を包括的に分析した。本論文は全 7 章から構成されており、以下に各章の概要を述べる。

第 1 章では、本研究を実施した背景に触れながら、研究の目的と意義について述べた。本研究は、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間にある相違点を明らかにした上で、以下の 3 つの課題を取り上げて考察する。

課題Ⅰ：「聴解ストラテジーの意識的使用に対し、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に差異は見られるか。差異が見られる場合、どこが異なるのか」

課題Ⅱ：「聴解活動における聴解ストラテジーの使用実態に対し、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に差異は見られるか。差異が見られる場合、どこが異なるのか」

課題Ⅲ：「問題処理の理解構築過程において熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に差異は見られるか。差異が見られる場合、どこが異なるのか」

なお、上記の 3 つの課題を明らかにする前に、聴解の理解度テストと再話課題の再生文を検討しながら、「再話課題の有効性」を検証する。したがって、以下の 4 つの副課題を設ける。

課題ⅰ：「再話課題は聴解力を測定できるか」

課題ⅱ：「テキストタイプによって再生率が異なるか」

課題ⅱ：「再生言語によって再生率が異なるか」

課題ⅲ：「再生困難な箇所は何か」

第 2 章では、まず、学習ストラテジーの定義及びその代表的な分類、学習ストラテジーに関する研究を紹介した。次に、聴解の理解プロセスに近接した分野の読解に関する研究を概観した。まず、読解に関する研究としては、「Kintsch（1998）の心的表象の構築展開過程モデル」と「Levelt（1989）の発話処理モデル」を紹介し、その後読解ストラテジーに関する研究を概観した。最後に、「聴覚的言語処理」、「聴解ストラテジー使用実態・意識的使用・指導など」、「聴解ストラテジー連鎖」、「聴解理解構築過程」、「聴解力と再話力」の順に聴解ストラテジーに関する研究を概観した。

3 章では、本研究に至るまでの 4 つの研究に関する説明、および本研究のデザインを述べた。4 つの研究に関しては、「聴解ストラテジーの意識的使用に関する研究」、「聴解ストラテジー連鎖的使用に関する研究」、「理解構築過程に関する研究」、「再話課題に関する研究」の順に説明を行った。これらの研究結果と残された課題を踏まえた上で、本研究の研究方法、調査対象者、実験教材、分析単位、評価尺度、分析項目を設定し、本研究のデザインを述べた。

第 4 章では、「実験用聴解教材」、「実験用聴解テスト」、「聴解ストラテジーの調査票」、「聴解ストラテジーの定義と分類」、「文字化と聴解ストラテジー抽出の手順」、「アイディアユニットの分割と採点尺度」、「調査対象、調査期間と実験手順」、の順に本研究の実験概要を述べた。4.1 では、実験用聴解教材の選定基準を設けるために、既成の聴解教材の発話速度・語彙の豊富さ・語彙難易度を分析した。そして、選定基準の設定について述べた。4.2 では、聴解テストの質問形式を検討してから、実験用聴解テストの質問形式と質問内容等を述べた。4.3 では、聴解ストラテジーの意識的使用を調査するために、聴解ストラテジーの調査票を提示し、調査票の項目、構成と評価方法を説明した。4.4 では、本研究の聴解ストラテジーの分類及び定義を示し、プロトコルデータから抽出した聴解ストラテジーの例を挙げた。4.5 では、文字化の手順と聴解ストラテジー抽出の手順を紹介した。4.6 では、実験教材のアイディアユニットの分割の基準とプロトコルデータの採点尺度について説明した。4.7 では、本研究及び予備調査の調査対象と調査期間、そして、実験手順を述べた。

第 5 章では、二つの段階に分け、分析を行った。第一段階では、56 名の JFL 学習者を対象に、「聴解ストラテジーの意識的使用」、「聴解テストの正答率」、「再生文の再生率」、「正答率と再生率の相関」、「聴解ストラテジーの使用実態」と「高低再生群 IU（IU: アイディアユニット）」の 6 項目に沿って分析を行った。第二段階では、56 名の JFL 学習者から熟達した聴き手と未熟な聴き手を選び出し、「熟達度」が異なる学習者の相違点を分析した。「聴解ストラテジーの意識的使用」、「聴解ストラテジーの使用実態」と「理解構築過程」の 3 項目に着目して、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間の相違点を分析した。

第 6 章では、非対面聴解における問題処理のストラテジーの使用実態を意識の側面、使用実態の側面の双方から、聴解力を包括的に分析・検証した。特に問題処理における理解構築過程に焦点を当て、音声の聴取をした後、問題箇所範囲、モニター範囲、聴解ストラテジーの使用、聴解の結果に辿る過程を検証した。

第 7 章では、本研究の結論、および今後の課題と展望について述べた。第一段階の調査では、プロトコルデータから 5250 件の聴解ストラテジーが抽出され、Oxford（1990）の学習ストラテジーの分類に基づき、王（2011, 2015, 2017）を参考にしながら、それぞれに分類を行った結果、40 項目の聴解ストラテジーが観察された。また、「再話力と聴解力」、「再生率と再話言語」、「再生率とテキストタイプ」、「再生困難な箇所」の側面からも再話課題の有効性を考察した。第二段階の調査では、56 名の JFL 学習者から熟達した聴き手と未熟な聴き手の 28 名を選出し分析を行った結果として、聴解ストラテジーの意識的使用の相違点を明らかにした。また、彼らのプロトコルデータから「問題箇所範囲」、「モニター範囲」の相違点を明らかにした上で、741 件の「ストラテジー連鎖」が観察された。そして、観察されたストラテジー連鎖から 4 つの類型、31 パターンが新たに観察された。さらに、問題処理における理解構築過程のモデルを作成し、音声の聴取から理解に辿るまでの過程を可視化した。本研究の研究設問に対する結論は、明らかになった点は次のようにまとめられる。

「熟達した聴き手と未熟な聴き手の相違点」についての 3 つの研究課題の結論は以下の通りである。

課題Ⅰ：「意識的使用の相違点」では、熟達した聴き手と未熟な聴き手は、①自ら情報量が選択・制御できる電子機器を通じて日本語に触れることを好むものの、積極的に談話ができる場面、つまりネイティブと接触する場面は好まない、②主な推測の手がかりは単語、文脈、背景知識である、③視覚情報等を積極的に使う、の3点に対する意識が共通して高い。一方で、相違点として、①熟達した聴き手は母語話者に近い言語行動をとるように努力する意識が高く、また、単語、接続詞、文法や表現等、ミクロな箇所の理解や記憶に深く注意を払わないことに対する意識も高い。②未熟な聴き手は母語知識に頼って目標言語を理解しようとすることや、聞き取れた情報をそのまま記憶しようとすること、表現しにくい単語を回避しようとすることに対する意識が高い。③未熟な聴き手は情報を頭の中にイメージし、さらに記憶や理解を深めることに対する意識が薄い。

課題Ⅱ：「聴解ストラテジーの使用実態の相違点」では、①聴解ストラテジーの使用種類に関しては、熟達した聴き手と未熟な聴き手の間に大きな違いがないが、使用件数では、未熟な聴き手の方が熟達した聴き手より多い。特に問題特定と語彙による推測では、両者の間に大きな違いがあり、未熟な聴き手の方が熟達した聴き手より使用件数がはるかに多い。②熟達度が高いほど、正答率がテキストタイプに影響されにくく、熟達度が低いほど正答率がテキストタイプに影響されやすい。③再生言語は再生率に影響を与え

ず、L1の再生率が高くなるほど、L2の再生率も高くなる。④説明文の方が物語文より理解しやすいが、熟達した聴き手はテキストタイプに影響されず、説明文でも物語文でも理解に支障はない。一方、未熟な聴き手は、物語文になると聴解理解に困難が生じる。⑤熟達した聴き手は聴解力と再話力の間に大差がないが、未熟な聴き手は聴解力と再話力に個人差があるため、聴解課題によって結果が異なる。⑥熟達した聴き手の方が未熟な聴き手より「問題特定」の件数が少なく、イメージや音を結び付けて内容を覚えたり、話題に関連があるものを連想したりする余裕があり、その結果として特定の箇所に注意を払うという情報の選択取捨能力が未熟な聴き手より高い。一方、未熟な聴き手は「問題特定」の件数が多く、語彙知識等によって推測しながら問題箇所を解決することに追われ、多くの時間・エネルギーを問題処理に費やす。その結果、イメージや音、関連話題等によって内容を覚える時間の捻出ができなくなり、テキスト全体の理解をつかむことができず、問題処理の段階にとどまる。

課題Ⅲ：「理解構築過程の相違点」に関しては、①熟達した聴き手では、問題箇所範囲が「単語レベル」と狭いが、未熟な聴き手では「単語レベル」が多く、「広範囲の問題箇所（文レベル)」も少なくない。②熟達した聴き手のモニター範囲は主に「2IU以上」でモニター範囲が広いが、未熟な聴き手のモニター範囲は主に「単語レベル」と「1IUレベル」でモニター範囲が狭い。③熟達した聴き手と未熟な聴き手は「問題特定から推測への連鎖」という連鎖のパターンを共に最も多く使うが、未熟な聴き手は「問題特定から推測への連鎖」に頼りがちである。一方、熟達した聴き手は使用した連鎖のパターンの種類が多い上に、問題特定をしてから、複数の聴解ストラテジーを用いることで、問題解決をする。④熟達した聴き手の問題箇所範囲は「単語レベル」で、モニター範囲は「広範囲」であり、ストラテジー連鎖を用いながら問題を解決し、理解成功率は4割台から5割台である。一方、未熟な聴き手の問題箇所範囲は「広範囲」が多く、モニター範囲は「単語レベル」で、問題解決の方略は主に「語彙知識による推測」であり、理解成功率は1割台に留まっている。また、熟達した聴き手は理解不可能な音節、修復が困難だと思う箇所、広範囲の問題箇所を未処理にすることが多いのに対し、未熟な聴き手は広範囲の問題箇所を未処理にするパターンも観察されたが、粘り強く解決することが多い。

「再話課題の有効性」についての4つの副課題の結論は以下の通りである。

課題ⅰ：再話課題は聴解力を測定することができる。特に習熟度が高い聴き手ほど、より的確に聴解力の測定が可能となる。その上、正答率の結果から再生率の得点も予測できる。

課題ⅱ：テキストタイプによって、再生率が異なり、説明文の方が物語文より再生率が高い。また、登場人物同士のやりとりと行動の変化の場面が多いテキストの方が再生率が低い。

課題ⅲ：再生言語は再生率に影響を与えない。また、産出された量と質では、L1 と L2 の間に大きな違いが見られない。

課題ⅳ：習熟度にかかわらず、再生しやすい箇所と再生にくい箇所の間に違いは殆ど見られない。また、情報の重要度に関係なく、「文頭と文末の部分」と「語彙難易度の低い名詞」が多く産出される。一方、「語彙難易度の高い名詞や動詞」、「物語文によく使われる名詞（羊飼い、茨、棘等)」、「複合動詞」は再生困難な要素である。

今後の課題として、(1) 既習語の発音に対する認知と調音への実態調査、(2) 理解時の理解構築過程への考察、(3) 今回の分析で割愛した中間レベルの聴き手の聴解ストラテジーに対する意識的使用・使用実態・問題処理時の理解構築過程への考察、(4) 日本語母語話者への調査、の 4 点を挙げた。最後に、日本語教育への示唆として、学習者の理解、精緻化推論の能動的な生成を促すために、物語文の導入の必要性が本研究での大変有益な教育的示唆として得られたと考える。また、本研究で体系的に分類された聴解ストラテジー、聴解ストラテジー連鎖の類型と理解構築過程のモデルが今後の聴解研究の一助となると幸いである。さらに、習熟度が低い学習者でも再話課題を通じて、聞き取り上の問題を気付かせることによって、聴解を促進させることができるほか、スピーキング能力を向上させる可能性があることも考えられる。このことから、聴解授業に再話課題を取り入れることを奨励したい。